この本は特別養子縁組がテーマになっている。特別養子縁組は、実親と養親の両方に親子関係がある普通養子縁組に対して、養親にのみ親子関係が認められる制度である。私はこの本を通して初めて養子縁組に種類があることを知った。四つの章から構成され、前半は養親である佐都子にフォーカスし、後半は実親であるひかりの過去から現在までの出来事が描かれている。

佐都子は同じ会社に勤める清和と結婚し、不自由なく暮らしてきた。しかし三十五歳になった時に母から不妊治療を勧められ、夫の清和とともに検査したところ、清和が無精子症であることが判明する。そこから長く辛い不妊治療が続くが望むような結果は出ない。子供は諦めて二人で一緒に生きていくと決意するが、ある日テレビで特別養子縁組を仲介する民間団体『ベビーバトン』の特集を目にしたことをきっかけに特別養子縁組という手段を選び、男子を授かる。そしてその我が子

を朝斗と名づける。

この前半部分を読んで、子供が欲しくてもできない夫婦の苦悩がリアルに伝わってきた。不妊治療は高額な上、続けても子供を授かれないことも珍しくない。金銭面はもちろんだがそれ以上に精神的に夫婦ともに追い詰められていくのがとても重たく感じた。自分にはまだ少し遠い話だけれど、この世の中にはこういった状況にいる大人達は必ずいるし、将来的に自分自身が直面する問題かもしれないと思うと他人事だとは考えられず、読む手が止まらなかった。そして、夫婦が特別養子縁組制度で子供を授かる場面は、分かりやすく描かれていて深く考えさせられた。親になるとは、家族とは。そういう簡単に答えが出ないことを問いかけられているように感じた。佐都子が朝斗に特別養子縁組で授かった子供だという出自を隠すことなく、明確に伝えて前向きに楽しい日々を送る姿には心を打たれた。まるでドキュメンタリーのように感じら

れた。

後半は実親であるひかりの話になるのだが読み進めるほど辛い展開が続く。両親が教員で厳しい家庭に育ったひかりは中学一年生の時に彼氏ができて二年生の時に望まない妊娠をしてしまう。そして『ベビーバトン』を介して産んだ我が子を特別養子縁組に託す。その子が後の朝斗である。その後ひかりは落ちるところまで落ちていく。「知らなかった」。「誰も教えてくれない」。無知な中学生が現実の厳しさや恐ろしさに直面していく。誰も助けてくれない孤独な現実をまだ未熟なひかりだけが背負って、とても不憫だと思った。信じていた人達を次々と失っていく絶望は計り知れない。中学生で妊娠、出産してその後も苦難の連続のひかりの人生。私とはかけ離れているのは分かっているが、なぜかひかりに感情移入してしまう。どこかで誰かが救ってくれるだろうという希望を胸に読み進めるがひかりは落ちていく一方だった。

特別養子縁組で子供を託したひかりと、授かった側の佐都子は、朝斗が生まれてから六年後、ひかりが佐都子の自宅に「子供を返してほしい。」という電話をかけたことをきっかけに再会する。この電話の場面は両者それぞれの視点から描かれているのだが、それぞれどちらの立場から読むかによって大きく印象が変わる。佐都子とひかり、二人の人生を前半、後半に分けて心情の描写を丁寧にして、「子供を返してほしい。」という一見、身勝手なひかりの発言を、ひかりを悪者にすることなく描くのは素晴らしいと思った。そして、所々に純粋無垢な朝斗の視点からの描写が入ってくることで何度も救われる。朝斗からの視点の描写が無ければもっと重たく暗い話になっていたと思う。朝斗がいてくれて良かった。

産みの母と育ての母のそれぞれの物語。交わることのなかった二つが終盤に一つになっていきそうな希望を持たせるラストで物語は

終わる。それまでは重たく苦しい内容が続いていたため、最後に救いの手が差し伸べられて安心して読み終えることができた。

最後に私がこの本を読んで一番印象に残っている言葉を紹介しようと思う。『ベビーバトン』の説明会の後の佐都子の言葉である。

「血のつながりがあるからといって怠慢になっていては築けない関係を、自分たちが出会ったあの家族は、懸命に作ろうとしているように見えた。あれを間違っているなんて、誰にも言わせたくない」。

とてもかっこいい言葉だと思う。血の繋がりも大切だけれどそれだけが全てではないという強い意志を感じた。辛く暗いトンネルの中にいても、いつかきっと明るい「朝が来る」。そんな希望を感じられる本だ。ぜひ多くの人に読んで欲しい。